

ある屏風絵の落款の謎

仙台市博物館副館長 樋口智之

第8回

落款の位置の基本

「屏風絵の多くは、二つで二組となっています。一つを二隻、一組を一双と数えます。また向かって右側の屏風を右隻、左側を左隻と呼びます。

絵に画家が名前を書き入れ、印を捺すことがあります。これを落款と言います。屏風の場合、大概、右隻は右端に、左隻は左端に書き入れます。今回は、この落款の位置に注目します。

基本と異なる屏風絵の謎

さて、当館には伊達家から寄贈された馬の絵の屏風があります。筆者は、江戸時代後期に仙台藩のお抱え絵師を務めた荒川洞月で、躍動する馬が四隻に描かれた迫力のある屏風です。

問題は「法橋洞月筆」（法橋は絵師の位）と書かれた落款の位置で、四隻のうち、一隻は右端に、三隻は左端に書かれているのです。屏風は二つで一組が基本、という考え方に従えば、これらは二組の屏風と考えられますが、一組は通常の位置に落款がある屏風となるもの、もう一組は両隻とも左端に落款があるイレ

ギュラーな屏風になってしまっているのです。洞月はなぜ落款の位置をこうしたのだろう、と不思議でなりません。

手がかりとなる資料を購入

そのような折、当館で購入した資料の一つに、仙台藩が江戸上屋敷で使用するために、文化元年（一八〇四）ごろに新調した屏風等の目録がありました。この中に「六枚折砂子地野馬之御絵屏風五双（中略）荒川洞月筆」と記されていたのです。「六枚折」とは六面のパネルを蝶番でつないだ形式のこと、「砂子地」は画面の地に金砂子が撒かれていることと理解でき、いずれもこの四隻の屏風の特徴と一致します。

そこで考えられるのは、四隻の屏風は、当初は五双（十隻）あったものうち、右隻一隻分と左隻三隻分だけが幸運にも今日まで伝来したのではないかと、いうことです。手がかりとなる資料を収集したことで、この屏風についての研究が進展したのでした。

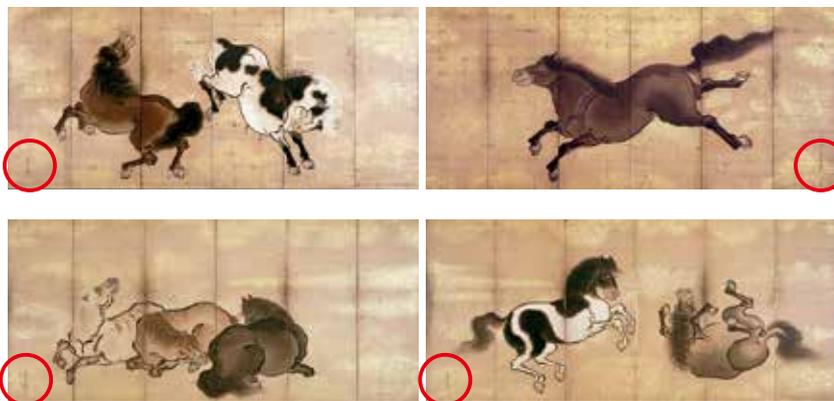
ところで、当館では、3月22日（土）より、企画展「新収蔵品展」を開催します。今回取り上げた屏風は開館当初

からの収蔵品ですので展示されませんが、近年の主な収蔵品の数々をお楽しみいただき、あわせて当館の収集・保存・研究活動にもご理解を賜れば幸いです。

今回紹介した作品の画像は、仙台市博物館ホームページの「収蔵資料データベース（二次元コード）」からご覧いただけます。



落款部分の拡大



野馬図屏風 荒川洞月筆 江戸時代後期 仙台市博物館蔵 ○：落款の位置

新収蔵品展

2017-2024

New Acquisitions : 2017-2024

3月22日(土)~5月1日(日)

資料(左から):
朝妻舟図 熊耳耕年筆(扇面貼交屏風のうち)、
宮城県指定文化財 薙刀 銘「国包」(部分)
すべて仙台市博物館蔵

おかげさまで
10万点!!

くわしくは、博物館ホームページをご覧ください。

【開館時間】9:00~16:45(入館は16:15まで)
【休館日】毎週月曜日(4/28、5/5は開館)、5/7(水)
〒980-0862 仙台市青葉区川内26番地(仙台城三の丸跡) TEL:022-225-3074

▶ 博物館ホームページ 検索
▶ 博物館X(旧ツイッター) @sendai_shihaku